

第 506 号

2025 年 10 月 27 日

土佐のわらべ

オーテピア高知図書館

子どもの本の読書会だより

《第 528 回(2025 年 10 月 9 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:10 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『古事記物語』 福永 武彦/作 岩波書店(岩波少年文庫)

10月の読書会は、『古事記物語』を読みました。8世紀に書かれた、日本で最初の書物とされる古事記。その古事記を子どもたちが読みやすいように書き直した本で、国造りから推古天皇まで、古事記全編が収録されています。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●名前がカタカナで書かれており、読みづらかった。兄弟や親子で殺し合いをする残酷な描写にぎょっとした。歌が現代語訳されているが、原文のほうが耳になじんでいると思う。子どもたちにとっても、そのほうがわかりやすいはず。難しかったが、古事記を読むことができてよかった。

●きれいな歌が現代語訳されることで、わかりにくくなっている。誰を対象としているのだろう。古事記は民俗学的にも面白い。子どもたちに読んでもらうなら、神話部分をもっと掘り下げたほうがよかったのでは。古事記自体は大人になってからでも楽しめる。この本が子どもたちが古事記に興味を持つきっかけになればいい。

●つかみどころがなく、ツツコミどころが満載の本。神様の神々しいところと俗っぽいところは世界共通だと思った。あとがきに「神やらい」という言葉があり、土佐弁の「子やらい」と同じ。古くから続いている事柄に、新たな発見があって面白い。いろいろな作家が古事記を題材に執筆しており、イメージーションを刺激する書物なんだろうと思う。

●日本の国がどうできて、天皇家を中心にまとまっていったということが書かれた叙事詩。兄弟間の恋愛や殺し合いなど、うそっぽいところもあるが、どこか本当かもしれないと思わせる。古代のことをまとめたものが、本として残ってきたからこそ、今の私たちが読むことができる。

●イザナギや八またの大蛇など知っている話もあるが、本で読むとわかりにくかった。殺伐としている感じがする。神話の世界から天皇の物語に移っていく話、女性が活躍する話が印象に残った。小学生には難しいのでは。もっと楽しい古事記で流れを知ってから読むといいかも。

●神様の名前は漢字にふりがながあるほうがイメージしやすい。神様たちはやる事が単純。憎ければ殺すし、美しければ后にする。神々しくなく、人間くさい。何度も同じことをしていて、どの話も同じ感じがした。因幡の白ウサギなど、細かい話をバラバラと聞いて育っている子どもたちは、これを読んで流れをつかむことができるかもしれない。

●これが人間の欲望かと思った。イザナギ、イザナミは女性の方から口をきいたからヒルコしか生まれなかった。今読むとすごい話だ。神様というより、勇者が権力をつないできたと思えなくもない。各神社にどんな神様が祀られているのか、土地の名前のいわれなども知っていると楽しいと思う。

●知っている話もあるが、古事記としてまとめて読むと流れがわかる。因幡の白ウサギなど、切り取った部分だけ読むとハッピーエンドだが、流れで読むとそうではない。興味のある子が読めば、古事記、歌、歴史などそれぞれに発展していくかもしれない。記憶をまとめただけではない。後世に残していくために、見せ場となる話も作られている。

●ひとつひとつの話は難しくないが、流れがつかめず、読みづらかった。系図や地図があるといい。古事記を下敷きにした事柄は世の中に多くあるので、自分の国の背景として知っておくと、そういうことが楽しめるようになると思う。神社のことや、歴史ある地域のことなど、成り立ちを知ることによって違う楽しさが見えてくるのではないだろうか。

●神々が頭の中で生き生きと動き、古事記の世界に没入できた。オオクニヌシノ神の冒険が楽しかった。キャラクターとしては、ヤマトタケルが好き。年を重ね、八百万の神のいる日本を自然に感じる事ができ、古事記がますます面白くなった。神様の名前がカタカナ表記だったことが残念。

次回 11 月 13 日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

📖『虹の少年たち』 アンドレア・ヒラタ/著, 加藤 ひろあき/訳, 福武 慎太郎/訳

Sophia University Press 上智大学出版, ぎょうせい(発売)

※申込み・参加費は不要です。